

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年元曆仁正月廿八日乙亥將軍家藤原賴經御上洛、二月九日乙酉矢作宿入御子足利左馬頭亭依去夜風雨洲侯足近兩河浮橋流損云云、十一日丁亥今日御逗留于萱津宿依去夜御不例餘氣也其後修理兩河浮橋云云、

〔十六夜日記〕すのまたとかやいふ河には舟をならべてまさきのつなにやあらんかけとめたるうきはしありいとあやうけれどわたる此川つ、みのかたはいとふかくてかたは浅ければ、

かたふちの深き心はありながら人目づ、みにさぞせかるらん

かきの世のゆき、とみるもはかなしや身をうき舟の浮橋にして、とぞおもひつゞける、〔覽富士記〕すのまた川は興おほかる處のさまなりけり河のおもていとひろくて海づらなどのこ、ちし侍り舟ばしはるかにつゞきて行人征馬ひまもなしあるは木々のもとたちゆへびて庭のをもむきおぼゆるかたもあり御舟からめいてかざりうかべたり又かたはらに鶺鴒舟などもみえ侍り、一とせ北山殿に行幸のとき御池に鶺鴒をおろされかつら人をめして氣色ばかりつかふまつらせられ侍し事さへに夢のやうに思ひ出され侍るそれよりほかにかけても見及侍らぬわざになむ、

島津とりつかふうきすのまだみねばえらぬ手なはに心ひく也

おもひ出るむかしも遠きわたり哉その面かげのうかぶ小舟に

飛驒國  
淺水橋

〔夫木和歌抄 二十一〕あさむづのはし みづとも、三兩本淺水大和又山城或飛驒。

〔飛州志 土地〕名所位山細江アサムヅノ橋爾布川

愚案、アサムヅノ橋ハ、飛驒ニモ越前ニモアル名所也、

〔飛州志 土地〕名所位山細江アサムヅノ橋爾布川